

な妹が大切に残していたのでよかったですでしたが、アルバムに張ったものを控えは取ってあるのですが、本物のはがきをなくしたのは惜しいことでした。

妹の名前は「武子」というのが本名です。「洋子」といつていたことがあります、それは妹が勝手に使っていたのでした。「武・・・タケ」は「竹・・・タケ」に通ずるので私は「竹」を見るとすぐ妹を思うのです。「妹が私について回り、私を守っている」と思うのです。

私が昭和十四年満州に講演に行き、そこを終えて朝鮮の北端、満州との国境にある朝鮮の新義州についたとき、迎えに来ていた羽間乙彦さん（第一回全国大会優勝者、後に毎日新聞編集局次長までなった人）につれられて旅館に着くと、玄関正面に「竹」の絵が書いてあったのではと思ったのです。妹が守っていると思つたのです。郷里島原に墓参りに帰るとき、諫早駅で島原鉄道に乗り換えるとき、駅で買った弁当につけてある箸が「竹箸」だったのです。人の着ている着物に竹の絵がかいてあったり、ふるしきに竹が書いてあったり、食事のときの器に竹の絵、入口に竹が植えてあったり、ふすまに竹、竹製のいろいろな物・・・とにかくどこに行っても竹が目につくのです。人は何にも思わないでしょうが、私にとっては、妹がついて来て私を守ってくれていると思ひ胸を打たれるのです。